



(ミケランジェロ「ピエタ」)

阿佐ヶ谷教会



信友会 会報

アメリカの教会事情 I・II (2019年7月28日)

キリスト教絵画の楽しみ Vol.2 (2019年8月25日)

阿佐ヶ谷教会では9月に箱根で全体修養会を行い、また10月には教会バザー、墓前礼拝と大きな行事が続き、恵みの中でこの秋を過ごすことができましたが、一方台風15号、19号、21号とこの秋に相次いで台風に見舞われた東日本の被害はひどいものです。キリスト教関係者が多く入居している川越キングスガーデンも大きな水害に見舞われました。地域の一刻も早い復興を願い、祈ります。

信友会報は遅くなりましたが7月例会の「アメリカの教会事情」と8月例会の「キリスト教絵画の楽しみ」を報告いたします。

(Y.O)

—アメリカの教会事情 I—

アメリカの宗教事情

ブラッド ルシード兄



昨年8月の例会では、テキサスの母教会を中心に話したが、今回はアメリカ全体のキリスト教事情を話題にします。

アメリカ人の75%はキリスト教徒で、当初はヨーロッパからの移民のキリスト教徒がアメリカの建国に携わりました。その後南米やアフリカからの移民、アジアからも一部キリスト教徒が移民として来ています。アメリカ人全体の62%が教会員であり、そのうち半分が毎週教会に通っています。キリスト教の教派については、プロテスタント派、カトリック、イギリス国教会、ギリシャ正教会があり、モルモン派はソルトレイクのあるユタ州を中心にロッキー山脈の西側の各州に分布しています。

今、トランプ政権を支えるキリスト教右派の福音派が大きな話題になっています。バージニア州からフロリダ、西はテキサス迄の地域いわゆるバイブルベルトに分布するプロテスタント、南部バプテスト連盟、キリスト教根本主義派、福音派が熱心に信仰する地域的な文化圏を構成しています。福音派はキリスト教徒全体の27%と大きな集団です。信条は、聖霊を受けると新しい人間に生まれ変わる、聖書の言葉は絶対でそのまま受け入れる。保守的な集団で政治的活動を行う傾向が強い人々です。宣教は国内にとどまっています。

メインラインのプロテスタントは、聖書理解は自由で現代の状況に合わせた理解が許されます。世界の問題に敏感に対応でき、海外伝道にも目を向けます。教会は誰にでも解放されています。教派として大きいのは、メソジスト派、ルター派、長老派、会衆派、バプテスト派等です。

メソジストは、ジョン・ウェスレーが産業革命時代に信仰復興運動として聖公会の中から展開した教派で、ウェスレーは会派を作ることはせずに聖公会の中にとどまっていた。しかし独立戦争の中で必要に迫られ、トーマス・コークを派遣してアメリカでメソジスト派を作りました。当初は、北部と南部で別々のメソジスト派で



したが、1968年に南北合同してユナイテッドメソジストチャーチとしてダラスで再スタートしています。

最近のアメリカの教会として特筆したいのは、黒人教会と有力な説教者による集会です。黒人教会は、教会内を華やかに飾り、ゴスペルソングを中心として、聖歌隊

の指揮者が礼拝をリードするものです。説教者も熱狂的な説教をし、共鳴する人々が奇声をあげて応える礼拝です。かつてのビリー・グラハムのような、カリスマ説教者による礼拝は、大勢の聴衆を動員して行うものです。ショーのようで、熱狂的な説教により聴衆を魅了する集会で、巡回しつつ行われています。

キリスト者は国内では減少していますが南米からのカトリックの移民が多く、キリスト者の比率は85～95%と大きくは減っていません。(文責：玉澤武之)

—アメリカの教会事情 II—

ニューヨークでの教会生活

寺嶋章兄

7月例会でアメリカの宗教事情のうち私の担当は東海岸、ニューヨークでの教会生活についてです。30数年前ですので今は変わっているかもしれません。マンハッタンから東の長さ60Km、幅2Kmの半島のロングアイランドで生活していました。その教会はマンハッタンのメガチャーチは満席で盛大な礼拝を行っているのに比べて大きな会堂でしたが日常は15人程度の礼拝でした。そんな中、私たちは二つの日本人・日系人のための教会に通いました。一つは日米合同教会で、1893年に岡島金弥牧師が始めた日本人と日系人のための教会です。1953年に3か所あった教会を一つに合同して合同教会としたところです。礼拝は日本語と英語を交互に話しながら進めており、2倍の時間を要します。常時100名を越える聴衆がおりました。この教会で、一組の韓国家族と会いましたが、日本生まれで戦後韓国に戻ったが、言葉ができず良い仕事に就けずアメリカに移住された方でした。満足な仕事と教会生活が得られたと喜んでいました。複雑な心境になりました。もう一つは、日本基督教団が支援するSMJ(ニューヨーク日本人特別牧会)という組織です。海外での生活で孤立している人のために、安心して集い安らぎを得ながらキリスト教に接する場を提供しています。ロングアイランドの教会の旧会堂を借用して毎週礼拝を行いました。時に家主の教会と合同礼拝を行い、共に聖餐を受けました。この聖餐には、戦時下のハワイの教会での日系とアメリカ人の牧師による聖餐式が相互の憎悪を越えてイエスキリストを記念する和解であったということ思い出されました。礼拝の後のコーヒータイムでは60人ほどで和やかな談笑の後に皆で「Dona Nobis Pacem」を歌いました。



ニューヨークでのクリスチャンの活動で注目したいことの3点を報告します。

1つは、ホームレスのための宿泊所として会堂を開放することです。厳冬のニューヨークは外での生活は死を意味します。男性のボランティアが奉仕します。

2つ目は、生活困窮者に対する昼食の提供です。平日の昼食はホームレスだけでなく生活困窮者を対象にして複数の教会からボランティアが出て行きます。食材は近くのスーパーやお店、個人から提供されます。

3つ目は、ホームレスのための冬物衣料の収集配布です。冬になる前に、市役所、バス停、ターミナル駅や警

察署に大きな箱を置いて通勤通学客などから衣類を集めます。それを種々の教会から来たボランティアが集め整理して、必要なホームレスに配るのです。

社会改革は当然必要ですが、目の前の困難を少しでも解決したいという精神からです。ニューヨークの人々は裕福だという印象ですが多くの人々はつましい生活をしています。

アメリカでもキリスト教は退潮気味であると言われますが根本のところでは慈愛の心を持ったキリスト教精神をもって行動しています。
(文責：玉澤武之)

信友会 8月例会(ときわ木会との合同例会)

キリスト教絵画の楽しみ Vol.2

「麗しの聖母子像—主題に込めた画家たちの想い」

奥山雄輔兄



昨年に続いてキリスト教絵画を楽しむ会を行います、今回は聖母子の表現に焦点を当ててお話しすることにし、37点の聖母子の絵画などを鑑賞してみたいと思います。

最初は、聖母子像では最も有名な作品の一つ、ラファエロ・サンティの「牧場の聖母」(ウィーン美術史博物館)です。あどけないイエスを抱いたマリアは、優しくも憂いの中でイエスから視線をそらせ、イエスの十字架の死を予感しているかの様です。安定した三角形の構図の中に配されたラファエロの聖母子像は、この後 19c に至るまで西洋絵画の手本となりました。紀元 431 年の宗教会議で、聖母マリアは救世主キリストの母として公認され神格化が始まります。初期の像としては 3 世紀後半の「オランズと聖母子」(ローマのカタコンベ)があり、3 人の人物のうち右側に幼児を抱いた女性が描かれています。その後の聖母子は荘厳化が進み、幼児も顔立ちも将来の救世主を予感してしっかりと大人の表情として描かれます。「聖母を描いた聖ルカ」(ファン・デル・ウエイデン)聖母を最初に実際観て描いたのは、ルカ伝、使徒言行録のルカであったことになっているようです。(その絵は残っていませんが)「宰相ロランの聖母」(ヤン・ファン・アイク)は上記のウエイデンと共にフランドル派の画家として有名です。この絵の背景を拡大すると、この町で火事があり、見物する野次馬が町中に集まっている描写があることが、最近の研究で発見されました。「書物の聖母」(ボッティチェリ)彼はフィレンツェのメディチ家お抱えの画家でウフィツィ美術館の「ビーナスの誕生」、「春」などの代表作で知られる画家です。



(ラファエロ・サンティ 「牧場の聖母」)



(ボッティチェリ マニフィカートの聖母)



(ダ・ビンチ 「聖アンナと聖母子」)

聖母子像の幼子イエスが指さす聖書を拡大すると、イザヤ書 52 章 13 節からの「苦難の僕」の聖句が書かれています。また、「マニフィカート**の聖母**」(ポツティチェリ)の聖書の箇所を拡大から、ルカ伝 1 章 46 節からの「私の魂は主をあがめ」のマリアの賛歌の冒頭の「Magnificat anima mea Dominum」からの聖句が読めます。「**岩窟の聖母**」(ダ・ビンチ)は、岩窟の薄暗い中に聖母マリア、幼子の洗礼者ヨハネとイエスが描かれています。イエスが一番下に描かれていますが、これは謙遜を表していると言われています。ダ・ビンチではもう一枚「**聖アンナと聖母子**」を持ってきています。マリアの母アンナと聖母子が描かれています。聖母子を見つめる聖アンナの面差しがモナリザの顔を連想させますが、いかがでしょうか。

ルネッサンスの巨匠の最後に、ミケランジェロのバチカン大聖堂にある「**ピエタ**」を観て下さい。母としては若すぎるとも思われるマリア、そしてその膝の上に横たわるキリスト、その精緻な表現は、まだ 20 代半ばのミケランジェロが、渾身の自信作として唯一サインを施した作品です。さて、数多く観てきた作品ですが、この作者たち誰一人、実際の聖母子の姿を見た者はいないのです。その全てが、描かれた時代や場に於いて、作者の豊かなイメージによって表現されたものであることに、驚きと感動を覚えます。

(文責：玉澤武之)